

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

愛知文教大学地域文化研究センター

第10回 小牧山から岐阜、そして京都へ

研究員 萩原淳也

織田信長簡易年表(永禄11年まで)	
天文3年 (1534)	尾張那古野城に生まれる。 幼名、吉法師。
天文15年 (1546)	元服し、織田三郎信長と名乗る。
天文20年 (1551)	父・信秀没。 18歳で家督を継ぎ、上総介を称する。
弘治元年 (1555)	織田信友を滅ぼし、清須城に本拠を移す。
弘治3年 (1557)	信長に反逆を謀った弟信行を清須城にて誘殺する。
永禄2年 (1559)	岩倉城の織田信賢を降し、ほぼ尾張一國を手中に収める。
永禄3年 (1560)	今川義元を桶狭間に討つ。
永禄5年 (1562)	三河の松平元康(のちの徳川家康)と盟約を結ぶ。
永禄6年 (1563)	小牧山に居城を移す。
永禄10年 (1567) 8月	稲葉山城(井ノ口)城の斎藤龍興を降し、本拠を小牧山から岐阜に移す。
永禄11年 (1568) 10月	足利義昭を供奉し京都へ。 義昭を第15代将軍に就ける。

「信長公記」にみられる小牧山

信長が小牧山に在城していた事実は、あまり注目されていません。その理由は、在城を記した記録があまりにも少ないからだと考えられます。そこで今回は、信長が小牧山にいたことを示す記事として「信長公記」の一節を紹介します。同書は、信長に仕えた太田牛一による信長の一代記で、信長の上洛までを首巻として、以後、巻1～15を編年とする全16巻で構成されています。この首巻部分に小牧山の記事が確認できます。

信長の小牧山入城

まずは、小牧山に入城することを信長が決定した際の記事です。「左候処、後に小牧山へ御越し候はんと仰出だされ候。小真木山へは、

ふもとまで川つゞ(続)きにて、資材・雜具取り候に自由の地にて候なり(中略)小真木山並に御敵城於久地と申し候て、廿町ばかり隔てこれあり。」

これは永禄6年のものと考えられる記事で、清須から小牧山のみもまでは川続きで資材等の運搬が容易であったこと、また、敵の小口城が小牧山から2km強ほど隔てた場所にあつたことが記されています。残念ながら築城の指示などの細かな様子については描かれていません。

小牧山から稲葉山(岐阜)へ

小牧山に拠点を移した信長は美濃攻撃を本格化し、ついに永禄10年8月15日には美濃の斎藤龍興を長島へ退散させます。ここで、「尾張国小真

木山より濃州(美濃国)稲葉山へ御越しなり」と、わずかな記述ながら小牧山から岐阜へ直接拠点を移したことが記されています。

「信長公記」は信頼度の高い

記録ですが、これら小牧山の記事を含む首巻部分だけは、他の巻と比較すると叙述が著しく粗く、15巻成立後の追筆であつたと指摘されています。この点には注意が必要ですが、およそ4年程度信長が小牧山に拠点を置き、美濃攻略に専念したことは事実であつたとみてよいでしょう。

小牧山在城期の歴史的評価

信長は岐阜に拠点を移すと、そのわずか1年後に京都へ向け進軍を開始し、さらにその2カ月後には流寇の身であつた足利義昭を將軍職に就任させます。これはあまりにも早い動きです。いったい信長は、いつ上洛計画をたてたのでしょうか。

実は小牧山在城期に義昭(当時は義秋)に対し、上洛に供奉(協力)することを強く約諾した信長の書状が伝わっています。

このことは「小牧山在城期に将来義昭を奉じて入京することを、信長が強い意志をもって計画していた」ことを意味します。

いわば小牧山は、信長の中央政權進出への大きな足がかりを掴んだ地であつたと評価できるでしょう。

問合先 文化振興課 ☎76 1189